繪入

山林夫婦

五

へ13
3297
5-7

門へ13
3297
5

山桝太夫榮枯物語卷之五

江東　梅暮里　谷峩補編

大正十年八月廿九日
本大學出版部

第十八

雄観吾を誹謗して操死せ却て託馬観吾こそ我名代名家剣家の名劍を汚なせ僧の公得。正しく父代討奪ひ取られ盗賊なりめ。はおりひめれど這といへれまがつても好く。りとり人面縛な詮儀なりんびも。此家の夫婦必ずいさりうえけまぞ毛代必ず疵とうけ弟きく切なる代涼慮な。權くこの家ゆ足をとどめ事代くかるる。何ども雄の情涼く影ユ茶日向ふなり観吾ユ裏ゆく事けれど。観吾も正しく夫婦の縁そありゆぐら。橋立の妨といて改め婚姻そのべて父母のゆ代なるれば。情みふほしみを重ゆしーグ。雄りの雄のるる涼便なく云そに一ト夜の

情のほどゝ成かしし。尚睦ごやと思ひどゝ夫と想ひ仏と寄しが。あゝて
ちくいぢ寐房に忍び出観吾に奥ゆゝた所へ住ひ。日頃お仏氣なれ共
あくいくれそ。仏に慕ひしこと斯まで厚くおりしも。よゝく辨へぬる
両個一名の何且成いづまとつかさげれも。愛慕の情浅さり色偽りれ名も
ほとゝおりひ。笑の名も叛く成かゝ。さがひそれの人情なれ。さび
仏のかとめは表證も形く。又ゝゝい成おりの浅く。先お入りまりし
観吾なれのは表證とうをぞ一応成持ゝゝを恤みちゝふ事の源
よりで。自然と慕ふゝ浅發まり。実のゝ名ばけもの。しと仏と
仕せ永く睦み楽まんとおりんども。若たゝ成の一端の迷ひ。後初
のほゝ成かんせ。今とおり悔仕れ。仏もなれむしとおりかまくく
薄情を責たまふる。女のゝ成を二世と堅き盟ひお神成若ちゆる

深き契りは男子といふとも。一端を仏成発りて。取度れちゝ
形たぞし。やゝ仏の顔ゝれ人汚さとんゝ。やゝ此家成立去り。妾が
仏と安ゝしゝやゝ。はゝめを替ゝれ光景お観吾は成りおりし。
この事でも今はゞゝも。我へ慕ふのゝ成浅ふいゝしゝ斯心のかりつる
ぞやゝ浅得孫。固より此とゝ成お今ゝ足もゝめがゝれ仏を。仏仏も
ひそゝに説話一事は有まば。仏ふ違へけゝゝれあゝば。両くまゝ実侘れ
ゝも更ゝし。ぞ実否成れをまぞ此家お足成留ゝ成。宥めけ。心も
肯ゝぞしていゝれそ。ほゝゝに仏の足と留ゝひかば。ゝゝ先の観吾ゝみ
と婚姻の障ゝとゝれぞゝ。ゝれぞ。ゝゝの愚痴と吐ゝゝとゝもゝく去
ぞし。父を討と賊賣成奪ゝれゝも知ゝゝ。諸国お道逢ゝいゝ切ゝ
敵も討ゝぞれ仏の事成出仏人も一端ゝ浅に盟ひ一夜の契り

の情ぶかきひとのしたがれふ。斯いてもとゝ行ざれば止む事なれば。ほんの
ちゝ汚ふ顧とれの親は歎とてゝ夫が祈ひ仏をはしり給ふなり
のこゝ両親夫へも祥ふ詰一面縛ふとしめがゝ恥辱なあるのこゝ那ゝ
ぞ仏の一命ふ断ゝ夫の後難ふ道ふとふ計ふじと矢入ゝと
すれを髻ふとりて引戻し噇とひと居眼ふ涙をゆゝこと歯を噛向方此方
へ拐けゝく。汝飽まで誹謗ふとゝ。然ひありけれ分なれば堪へ忍び
ふ。迚ふ此ひを降さんと那との奸婦。今下夜の繋りに互ひに赤仏と所も
も仮初のいさぼゝとおもひぞ。親しのい。狗ぜれ妻とおの乱れ。不義
の沙汰ふ及ぶはじゝ。ぢれども今汚智りて我ふ夫とせゝれを悔ふも詮
なゝ。合せゝれをかるゝに放且安さと障らやもあとゝれが。波ぢかり先
ゆれ不実となるはじと。我が浅智ふ妻とおのひ。縁由ふしゝゝふい明

ちゝゝ愚さとと砕ればうり掴こけれさられを。やよれ分実の夫ふもあとんが。
先ふ為りし僧とそひゝふが夫とおのひ智ゝれあるふとそゝゝ打擲ふあひ
けれとゝ思ひせば。嗟ゝくとそけれ那ゝ。迚ふ此方たまで主腹ふしあまひかば。
男子のぶとく殺害を那ゝふ為れやゝ。かゝ誹謗ふとゝもあるゝ斬得れ
事憐ふはじゝ。えさげをてゝれ仏ぞやと。観吾と拂ひ退け今災ひふ
えとそゝゝこと。又欠出さんと做とふとや是まぢと。後方より斬付ふ白刃
深りて紅のぶとく鍔りゝへ淋しふ。ふの中ゆれ山ほゝれとゝ切放さんと
すれふこや露ぢかりいふ事ゝ。これをゝとに掴りふれ紙ふさし上
ちれども。記吾それふもかまはぢ。おのひ知れぢ思ひちふぢと憤怒の力ふ
数ヶ所の疵。そぶはれうゝみふ白刃ふ倒れ。人のえ答
めんこと那おのひゝ取ぢけんとなると射雄ゝふ掴りゝれを何やゝんや

又新み。字紙なれどいぶかりうとう。灯のもとに仏そなへて見れば。

君ふきそひましくるるの中くうり初の
仏あとゝ好〳〵吉野桜あとしかすまつ露と
きえ〳〵のかひろふ〳〵おもひつぎ〳〵仏ひらりとぶつ
山路の煙りたちそふ〳〵るも好ま洞の友一かさ
なふね芋瓜の雲ふ〳〵ものいろと沼りと
ちろ好ま文のかりはうた世ぶきふ〳〵ねうち

せんと〳〵てんび変ましくすまうもはるんかと
果も好ま自日ちかぐ〳〵ぐちの仏はむとぐ自ね日とも
那ま〳〵ちの結ひ西し夫ありふ〳〵ま
海山海〳〵芋ひまもかひあま仏の不義必ひ
なま〳〵ん〳〵すれども古りしそ好はまるまで
きのふ雪を吉ふの水となりて我とつぐの
心の海〳〵好べ仏ま稚仏芋ひの江方は
あえあまを海こゝはは舟を死てなど不孝乃
罪をりびんをめとを海まるは仏あもか〳〵ご恐

拾めのゆくり形〜思のおもふいまふの姫さふ
死んと知るとも私作りし仏もらせ給ひし思ひふ
ゆえなくばけめなんうゆ知と志ひまかふ世しも
仇ごうの石民ゆもあふぐる四方れ一夜の宿と
かぐう形〜ようなうぶ写るもなふたうあるこ川目の
うのしちへ
そよひ思のゆ〜まふ府害せんとのうゆえふ
さゆくも此と告まひふせるくを思ひ付ぎども
かり秋ゆも出ひうけ母えのあふまふ告ん
るの道形〜ぶぞと思ひえぶ出やせんかくや

せんと仏代ひあさ〜続ゆもゆくねゆふとぼし
の数〜さぞれゆしと思ひ思いうんとそのゆ
かゆ〜君のひるゆかうり死ん半とそうひ
死くの後を書おくに告るも一〜んのぎりも
くらみを後ぐるこのうまして有れ数
ひうふのしゆもおぶ出ゆのふぐふびんと一
きんのひるうふ稼ぐして嫁といひふまで思よ
ゆくひ〜ひのふ式うの世を去る事とまてを
流くぬるゆ一君くゆるゆ〜せるゆ〜のゆを姉せの

笑ひも偽り申さるべきやうなく違ひとりけまし
つるがなたのふは君の御やく人を亡ぼすべ
四方のつごうもひもさけぎくまく人をうぶぞはる
らひやすくく死くきたる四人をあどりゆく
ほうぶきより四方のうへの仏かり告たるい
中くうたよの紙筆をとしばらく
出しを筆をあり
なまうを為ぶおまれゆづうへ仏りをりあも
四いうをむへいうの仏かり出流りく

天をおりつるの結ばれぞ枝のめも仏ふうあ
をちぐの四ふ思へる事仏御ぞきたを
きふを今を治きうも見ぞとぶきうぶ
玉せんもかくらあいぶかんとも折もわぞ只
五万ぶ仏とうもあぶらぞの結びとめし
すなくんるみたこ仏ひをくわんが夫あ
なりて帰りぶ半ぶ一ふををつくたあの
めくんかと志くを必とめぐ濱へりくた
貝を仏御ふらもふも條の貝を眼あを

はるばる子安貝のみとり給ふ又三十三所
の指あるく仕立て衣を召されをけが
ゝ〳〵おとなの子の育やうと申ながら世ゆゑ
まん〳〵繁昌申し〳〵世ごろ三十三所を
まれも捜ひ又まで我身なぐさおのしく極
のごとく君ふくれぶるとも花ごとく
くり山あるみ出くらせ世ゆくゆく
こゝ海の一ばなるを神もあるれをまひ
あや出れはりまれぐらも出しかぶぶの

姫〳〵ちの子のまれたるすも神と居
めめる山冠とあるゝ〳〵
一
九さのもりつくゝがゆゝ母人がゆゝれ肌身ふ
こゝ人のゝゝかゝれ付長ふけゝ三ゝのゝ成おれ
汁箱のゝ引ゝ〳〵入ゝ海ゝ〳〵ゝ〳〵ゝかゝみ
ゝも出ゝ引ゝ引ゝしあゝたなる出寺ゝゝゝが
山信公引一ゝ神ゝゝゝ又ゝゝんゝの二ゝ
同の引出しゝすゝゝ入ゝゝ神ゝ出ゝ香ゝ
るゝ氣付ゝも用ゝゝゝゝ出ゝの愁

をとこけはひ人などゐあはれ〳〵と敵なるあはれいづ
地と定めをれば身すれば涙ぐましくよろ
ぼくふとくをあげはいくせんかも白ひの
袖こゝろ茅の紙を切りのとゝ思ふ思ふ
身はいと此身はあれども心はかりはいと
が身より重き上まはふせど天の恨いかか
何せふれてしたぐるべかりけるいとのご
けれをこびけれを此ふのかぐるを
ふとびぬかぐべくあるをいそぐ告

いせがれくたぐらのこゝろのせか
ゝるものんがもやちふぬ人言りの
今日を限りのたゝあられぬ思ふおもひの
万が一死ふ恋はふふとそれ
とゝあくく

讀ゝろ。叔を斯厚ところ所とも高ふび。実我宿志と訴えとのこゝおりし。一
湯の怒りふ思慮もつふび。殺害ま及びこと不便なは。皆我浅智よく
もとる所と悔ひくも詮なく。宿志とげるば誓つく刺髪ま。泄が跡を訪
吊ふべしとく。声も惜みなく泣。ゝ所よあまれ涙とおゝ人。くいてるゝもの

人ふん咎られなんぐ。雄が仏ぞせられも水の泡と消うんとそひ泡。おぐうが
教のごく泣く我寝所へ抱へ入れ閉じ。観音を初そうお
撫くかくれ去りぬ。山角を搖立て蜜〳〵高鐵ゑし。そや夜も深ふまて家
の廻りも絶。附ふこそ絶えて観音が寝房へひそうそ行くこそうそ仏よく
寝くれさなれど折はしと臥る枕辺ふより。咽えとおぼえふと絶え
刺貫くんぐらどあれもせぶれおも仏はりぐ。仕返〳〵喜び胚のけぐくたけそう
ほ斬さいつこ。寅早息も絶ぐ〳〵と両個を大ひ怪び。観音なんてうくを
仏ふかくれ雲も祈。善そいそぐ〳〵なれど。そひ五日ぞ吉日とは。婚姻
整ふぐしとて笑ぞ合ひ。搖立お目寄なしけ見ばいうも人目お忍ぐる
うちち亡戯ぞとり応付ぐと衾しめられぐくいうに観音ふあふぐしく
悪墓ひくある雄なりと笑。搖立も周章ぬとうに傍の灯火お咒〳〵こそに

えとぶふぐくもなに雄なれど。死〳〵れ髻ぞまふかくみ。やをれ惜ぐ女うな。
我と絶ぐうり愛をうふもあくぶれども。逢求むる僥倖もあくば。汝ぐ笑目よに
ほふふもれる山角お娶せぐく積年おりひけりしゆ。汝ふ恥くと垂くうぃいう
なくも妾ぐ実子。縁でくお我家へ寄り。何事も糸口ぞうぐ〳〵なれど喜
ぶるうらふも。實の紅馬観吾なぐ寄くうくを。一端いくくふるとも縁ゆを
偽りれ顕ぶん事ぞおりひ。今霄ひそうに殺害なくんと計ぶしにいうゆ
とり観吾お代ア死と事の腹立や。夫のを形ぐぶで當國ハ富うといくとも
あも立し驛路よあくぶれば。定〳〵れ旅店も形〳〵故ま豪家と求お一宿ぞ
ちんとそれとて黄金ぞ貯へりひ旅人を卧。いく〳〵寝入くれをえ迎蜜ふ
殺害なし奪ひとうんと做をに。附なくぶして雞の附を發そ。その声ふれ
り形〳〵の雞俱ふ公名の附と告めれで。旅人をや目〳〵ていくぶおりひる

も空しく斯ることと成り。おれども。ゆえあれ名と笑ひ雄といへれ名ゆ
へ。かゝれ変病もありまされやと我寛子ゆおりふ仏添それを捨おしと妻
ゆ恩ゆえ水代を死されを人間のこゝろよあはれ鳥獣ゆも劣られ情と
都なれば當國の中ゆ葬り一堰の塚と流。印の石ゆ彩塚と切付末世まで永
く恥辱とあとへんとがとと突き。此死骸を彼地へ葬て。汝一端この家を
立退いゞ地へなりとも永ゆ落付なばひそろに音耗ぎし。都志王丸の実
否ゆくじゆ嶺首尾そのひわゝぐ。汝を呼迎ひなん雪ぐかりもこゝろゆ
怠りゆく。安寿姫を尋ゆく父の故主の由緒とりて。玄蕃要道ゆはけ
入り。當時勢ひ猛なれど彼ゆ咬拳ゆて都へ門論ひ。丹後れ
私領とりて百辟の怨ゆも加へて。汝と俱ゆ栄花となとぐ。當主を
いゝゆゆ仏のはゝなれども。こゝ流がゝ好ゆは先を何をのこゝろゆ紛と

わりこゝ仏。彼羅妄執ゆくじ得させくおりひけれども。未ご時至ゆざれを
悔れなり。汝國守ゆも好ゆば威光をこゝろ捜一求ぎ。知ぎげれの
難きるやゆゝんと。ゆや嘗に拙きれどゝ。ひける。欲情よゝみゝゆ仏
の愚ゆぞ。夫を扱ゆき愛ゆ又忘草をこゝろ母の忌日ゆめゝりしを。そ
うゆ忍び出ちり袋の中より母の戒名ゆこゝ生。押いゝゝ南無妙法蓮華経
證仏果菩提とゝ流の中ゝゝゝ愚痴いゝて。田向なしけ流ゆ村圏
玄蕃の家臣完戸反此光景をゝゝ居しゆ。黙頭忘艸ゝ後ゆこゝ布と
こゝ口ゆをはせこるゝ小ゆ縛ゆ小服ゆうい迎奥流ゝ忍び入ゆ反ゆ
くゆゝ下面ゆ讀ゝゝ知ゝ。

第十九

金佛都志王の災ゆ代れ
去ゝ忘草を頃日太夫の傍にゆりて。殊ゆいゝゝ流けをいも善悪の仏

を知ふこれで休めれとゝ云もなく。たゞ〳〵側を放れで柱立ふとゝくられ。
磐木正氏の一子都志王なりとゝいふ〳〵責けれるゝたゞ〳〵なりられで。今日
の苦患を逃るゝは聖の淫義のたゝきをおりひ。袖袂を濡さね涙間を
形〳〵此家と敢といろ〳〵へもゆうめと。ひそに忍び出仏をせげど道ゝうゆゝ。
游〳〵國分寺の厨厨へ越入り。母と搾〳〵腰かゞめいへれを。小子い當山の
長者ゞ許ゝ召はゝゝ形〳〵者なりしゞ。妻〳〵れゝの〳〵邪見非道いふゞゝもゝ〳〵。
仏ゝう人ゝ仏ふおばへなれ吾と宮ひ責ゝ。ゝ子ゝ忍ゞゞもけゝ。小子も
怨ひある者ゝ二ッゝは父母の跡吊ゝ〳〵ゝとおりゝ〳〵を空〳〵死ゞゞとゝふ。
無ゝ情ゝ無ゝ無ゝ抱圓ゝゝゝゝ。菴主恤ゝゝゝも肯ゝ尋常の処ゝ
匿〳〵形ゞ情〳〵ゞゞ。いゞなゝゞゞと深念をゝ梁のゝ人の古紙竜ゝ卻。
忘怜を中へかゝし術氣なゝゝゝに引あゞ。やゝれゝ〳〵ゝゝ〳〵と喜び

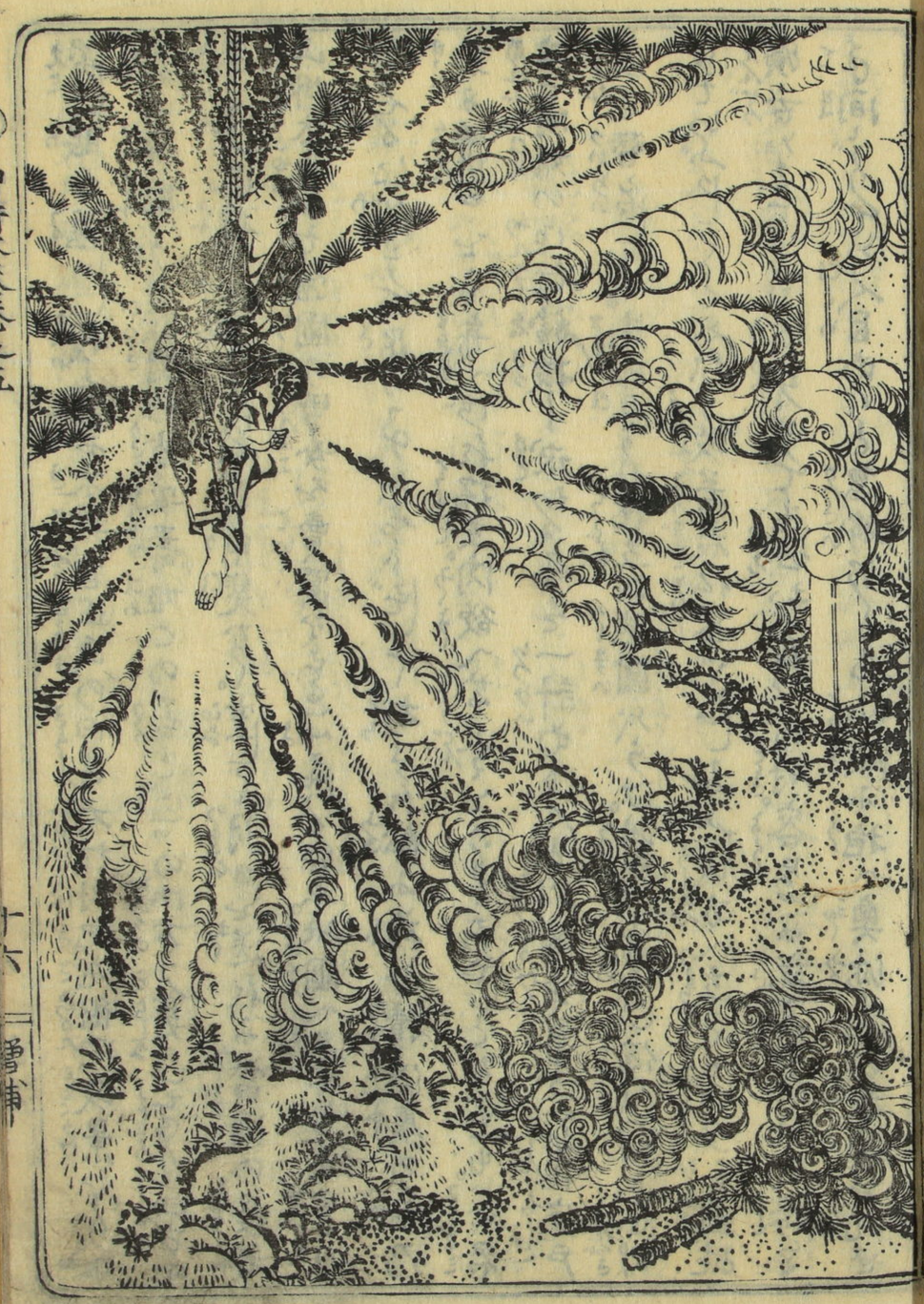
居ゝれゝとゝ云へ。山椒太夫の奴婢橋立の指揮ゝゝけ。迹ゝ追ひゝゝれ怜の
國分寺へ逃入りしゝ遠目ゝ見留け数多れ保児乱入ゝゝゝれゝやよ此
精舎ゝ三五ゝ近ゝゝ美少年。越ゝゝみ〳〵とけゞゝに入ゝゞけゝ
なりゝゝ出ゝゞ〳〵と罵ゝけゝば。庵主田答ゝ。人をゝゝゝゝゝ出家の
役ゝゝれで。仕落なゝとありて逃忍ぶ者ゝゝば俗れ事もゝれゞけゝと。
怒〳〵ゝゞゞなゝ。門ゝ遠ひゝゝゝと何氣なゝれを養ゝけゝゞ。ゝ益ゝ海
ゞれゝゝも詮なゝゞゞゝゝて。寺内と捜〳〵客殿厨厨の隅ゝはゞ。泥臘
ゝ踏迎泄形〳〵ゝれゞゝ曾てゝゝゞ。一位梁の古紙竜のうゞめゝゝて
ゝれをゝゝ忘怜の匿ゝ忍ゞれ所ゝゝゝとて。搾ゝ梁へかけ〳〵卻ゝん
とゝふ。搾折腰折絶入ばうゝゝ。これをゝんて半ゝ此事遂ゞゝ
ゝんとゝれふ。格立の怒ゝんゝゝれゝ進ゝれを。厨厨搾とかけ

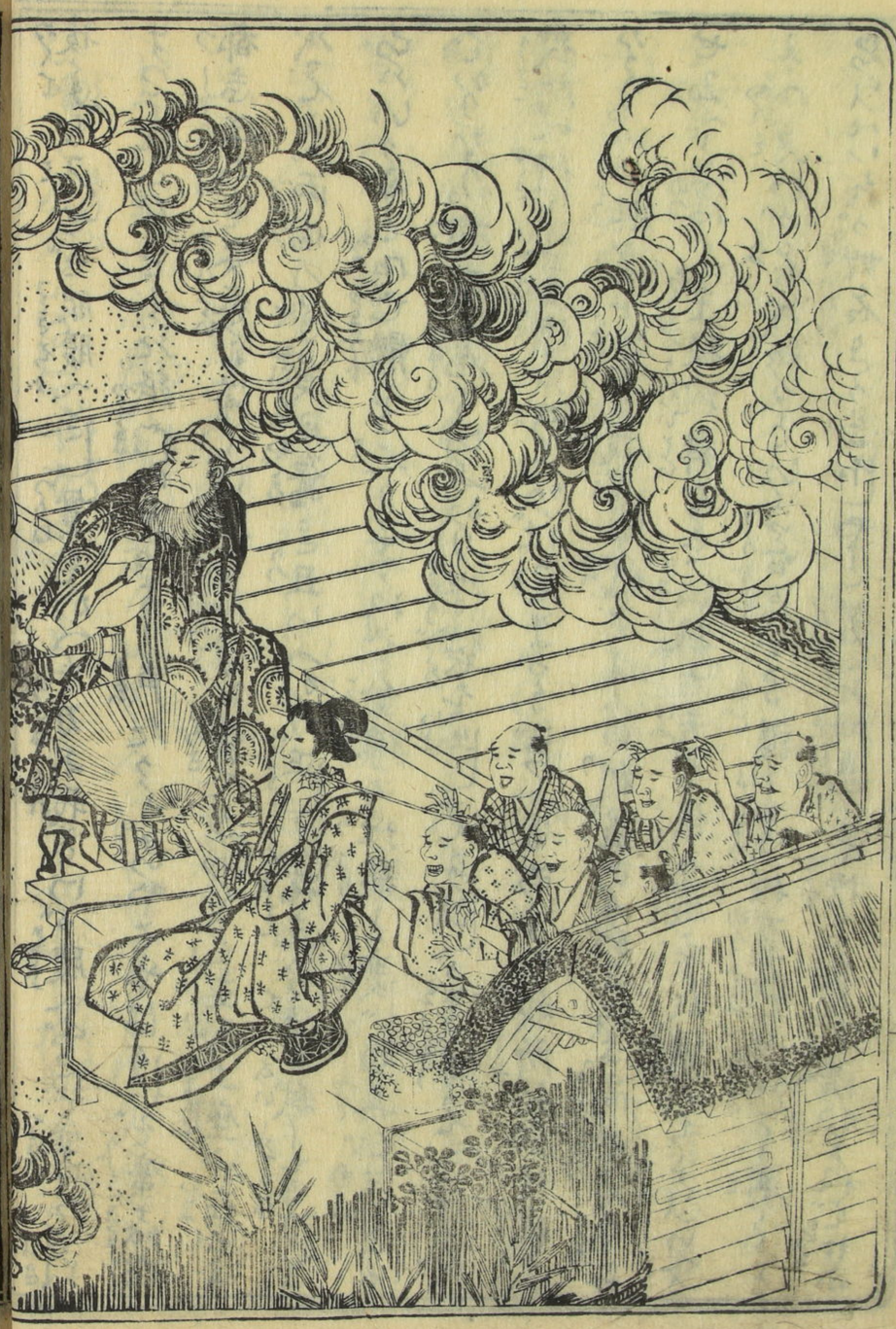
蓋を明け見れば。こゝいうゆ忘草あり〳〵。一寸有余の金仏の地藏菩薩なれば。善成者も悪き者も驚うぢ死の形。直地に紙竜の蓋を去り。楷立の怒に宥めん〳〵ゆふこの古紙竜に抱かん〳〵と商賣なし既に行去んとすれを。庵主不諾して。ぶむを。折檻踏打さん〳〵誹謗なし。紙竜に脊負ひ。いらはして持帰て。楷立へ去りの事に述庭前へ卸へぬ。楷立もいぶり紙竜の蓋を明こゝろ。金仏の宝像あいなりして忘草忍びかくれ居たれば。奴婢呆〳〵掙こいぐきもなり。稚く口と噤〳〵おへ〳〵に楷立を眼を瞋し。汝名乗りて忘艸をかゞふとてつゝへをこゝろの悪き者ぞと。有合ふ杖をとりて打んとすれ哀れを乞ふ怖を慄き。奴婢名乗り〳〵逃延う。楷立を忘艸の襟髪に取り大地へ噇とうち居ゆれ。とのゞ角のゞ素性を宮ふとゝいへども一言の回答さへなく。剃へ

逃かくれ家僮の者の目に驚うとも。つゝふ眼を抜るあらはし面を遠ふぎ〳〵もゆ〳〵ゆゞ汝がにより。磐木の一子なるゆゑと吐や表證となる。ぎう系圖なること出とも。汝と玄蕃が手へにし賞令を頂うんあのこゝろなり愛子山角太夫出世の首途も形ぐれと。斯こ汝を片くそのつゝふが仇も答ふせよと。責めれども守袋ゆりのおもつえされで。忘艸は口より舌のうへにうと吐せんとて。杖を振あげ〳〵打これ死も云ざれやいやや〳〵と續けこゆあらんを形ぐ〳〵に正氏とやゝん一子ゆへあらぬ。あとこの人責殺されに至るも舌ゆ知ぬ忍さで仕方なそめ〳〵と婢女ふりて麻縄をとりよせ後方へ縛り。麻縄の先をとり樹木の枝を投越つとれ艸を繋めゞ樹本へ松葉に掻集め焚火ゆ庭前ゆ燃焔〳〵と煙り空に満く日月の光を奪ふ地を走れ煙りゆ洪波の湧ゆ

似ていくすさまじく。忘艸を見て刹ぼ結び観念はしじゑ形勢なりけるへ
今こそは代費し強く責るとも詮なくうくし。表澄となるとこゝたの一瓜あくばも
玄蕃う家臣宮元戸長うまへ度し。後の栄花を尚極むぞくおりひけれも我
夫この比忘艸代扱めの非道ゐ似てく非をなうふけるぼいぶうり妨るんを
遠慮して速ゑ事代没せんと幽ゐとひ。今ゐ思ひ知くせんとて捕ようひき
卸ど。山桃太夫を傍ゐ呼りて忘艸のうえぐれで。いづくへう走りけるふえと
驚た此所彼所ゐ行く捜し求むるども。更ゐ音ふげれで書院の廣庭
へ出りえうにしや格立匿し拵られ剣をりて。忘艸の胸を刺けるゆけゆ吻と
いて死くげり。丈夫この光景代ゑく大ひゐ周章めさめた格立と行方
へとうく突退忘草の傍ゐ走り行くうにてやとされう氣落忘
ひ嗔と尻居ゐはして。十方ゐられた法をおりひ返し。格立代ひうとく人

抜くもうえせを服腹へさし貫く。かへと刀ゐ我とつが腹へぐさと突くく。
まうさんとなとと紙門のうちより声たく。さやとやはりしを蠱去作。
都志王丸を安養ゐはゆけれと。四多代携へゆふくと立生上座ゐ在さる
代えく。両個のゑ負且驚を且いぶかり。正しく格立がゑゐ我しもりしを。
ちへいうゐと四亡體をえくちられで。金佛の地藏と変じね再び呆るる
でかりなり。都志王丸もいぶかり守袋を出しえるひしが。る像えんばとば
彼所へ行くゑ。る係代とりのげ。えまがうぞくもゐくね我所持の地藏る
なり。いろ肌身を放さ我身ゐ代えるふの利益ありがとけよ。尚此うえ守ら
せゑんと厚く主従礼拜なを。山桃太夫も倶ゐ感ぞた涙代ちくひいる
を。四身つが名代知るとい若君とる護りもれた支状を正しく納ること
ゐひけれが。姓名ところをやと苦した吐息くて扨ようく洗かくれでにゐ





笑し眼を涙にし。我こそ磐木判官正氏の旧臣太村外記左衛門政景なり。江
家の騒動より睦月の方安寿姫との君と。三ッの御方ハ失ひまり四方ふ
奔走なし。捜し求れどいへども甲斐なく。空しく月日を送れる。当国の長者
山椒太夫こそ諸国の男女を売買なすと聞けるゆゑ。此国へ足をとゞめ支状
そうかに餌ひて足るよしをいひかへ。朽られ船に荷を積浮虚の風乃
前ふ覆まくても舟へ片れ捨立。肉欲へ莫令をかへてあやしとなすとも。若君
安寿姫の御行衛捜し求むる方に一計あらんと。村岡玄蕃が家臣宍戸
足と替名して。先の日より捨立ふ抱園なりけ。此家ふ忍び伺ひつゝ。忘艸
とそ聞しくと思ひし故若君仏事をなしたまふ後方へ立えぬまり。益此
演舌なきとも木芽までも仏ありとの時。容易ふ説まいらすが。悟り
手間どりては人目ありと。忽絆ふくも小服ふ抱へ。奥深とに表澄を乱せ

て果して若君なれの嬉しさ。又汝雌雄の剱を宝となせしと聞ば。先ふ後園
のすゝゑせし蠹喜作なれるを知るありとて。山椒太夫宗甫とけふひわる君
悪なれうんとせや心ふ践れざれまども。ひもあく。此世ふ行べき命あらざれば
とらさし息殺氣ふ見えまれを。外記左靖つ太夫が傍ふさし寄て片袖をいう
ちふて瘂口へ廻し。きりくと志しれだ太夫ハそのまゝ氣力を増しつれそいう
ふも御家の老臣純馬俊国の家ふ育ちられ蠹喜作といへる倍臣なり。戯
悔ふ罪を滅せんとにハあらざれど。自らなせる従ひふ罪せらるべき一命
も。主人の情ふ存命ありける子細を。家の掟を叛き拥といへる側女と密通
なし。一夜妻秘の戯ればつらふ実の身籠りて一個の子さへ生のびられふ割へ抒
の女子を儲ればぞ。笑ふには似け注よつまゝ恩愛の道日ふ深く。人まぬがれ
生育名ハ雌雄とほけして程を酉ふ当つく出生なし。我家の持伝し雌雄

の劔はいとれふめぐ不動の梵字はすりたる劔をれば。両個を守る陽神を
たのめれ仏ふ名ばけしを。愚かるも親ごゝ孫ぞうせるの悪縁自
然と千名を訪れ者あれどもや死罪に及ぶべき者ふ主の情ふ死をのがる。
俊國ふそうに我へ告けれを。主家危きに帰となば。我へ報ふべき所ふ磐木の
伊家へ報ひよと堅く約定を。主人の先見ふ違ひ両家玄蕃要道ぐろふ亡び
めれとやしもを後とぞ。倍臣の小子さほで四家の危きの且夕ふ知ると
を。夢ふぐに知ふげれば余所のやうふおりひけ。浪人の身ふ仕る所も不定
ふく。折合れの殘念なれ。因果覿面の恐ふや。綢繆ふれ柵を今更故
主の遺言ふも笑ける怨敵村岡玄蕃要道ぐ忍び妻に出せ。ふれ娘
なりと。やと直ふ孫の娘唯一個を捨ふ離別うとも。彼ぐ乞ふ。
なりふれで便なく。ひてのとかふひおりそれより故主の義言を後睦月の

方安寿姫都志王丸の三ッの方ふ捜求めと。諸ふ扁歴の中此國へ止まり。
ゆくりおくも此家へ入夫となれ。それなる妻の非義非道の家こそ傍傍と先主
に増れ悪行ふし四方へ人ふ走ぐ。老若男女どいうぐ賣買ふ。餘
業と志ふ利潤を貪ぐ。しくは磐木家の方ぐにもや在そうんと眼ふ
はるれ若君も倍臣の身ふ。高貴の席ふ加ふ。稀ば知ぐれどもうしく
も賤ふ。ふぬ貴族の風俗の自然と体ふ。そうに寄ぐの系譜
をうくふ。我存念懸ひとれ都志王丸ふ。おれしけば。はは運と結んとつぐ傷へ
金ふ勿論おくも非道を表ふかざり門あを。ぐ玄蕃ぐ
臣下とおりひ。恵書ふ若君ふ合ぜなば災ひ。ふんと。殆鈍をりそに顔へ
印をれふ其痕ふ。ええざれを。一度おくば二度三度地獄ふ堕ふ代ふ。
たぐひ稀ふれ利益とい若君の法洪運非ふ。ふくる芝金ふ倉廩ふ充満

われで。はさうれ時を敵要道を討亡と物の軍用金と。ゆゝし積〳〵れ我す志
を用ふ立〳〵玉道し。又此雌雄の劔の二振廻り〳〵て我家へ帰り名劔
の傳来を記し物ゞら。心賤〳〵れ我〳〵れ所持するとぐさ不ふ原此劔を我先
祖北面りし時。禁中へ夜る〳〵怪〳〵てものの生りければ。勅命下て禁裡ゆ藏有
二振の劔を以て〳〵霊劔の法を後〳〵。悪魔降伏うさしめし功ゆより。則不動の梵
字居りたれ陽體陰體の二振の劔をその任下し賜へる。不動を閻の手
の一代を司れ守ゆの陽神なれどとて則雌雄の劔と号是を帯そる時ハ。
必死を避れ名劔ゆり。其後北面を致仕本国ゆ在り時家ゆ禍ひ有り〳〵。非
命の死も做さんを主人郡司兵衛後国の先祖の為に辛て命を助け〳〵る。
其報ひとして雌の劔一振を送り。永く主従の因結び。甚連枝の中に
殺伐を嫌ひ民下ゆ降れ者ゆりしゆ。未世ゆ先祖の残〳〵かゞれ代ゆ

うんなりとて。雌の劔を贈ゆ立ゆ。我先年山城の清水へ流ぐれと。
旅人の事論一人を非道ゆして強く。今一個ハ不勢ゆて弱〳〵弱れを助る
人情ゆれ〳〵るに忍び〳〵。善と悪との街ゆ立ちて人を殺し一個をたゞ。
其殺害ゆ及び〳〵て此家の先主山椒太ま。助け〳〵れハ託馬膳輔といふ
者ゆて再生の恩と忘び〳〵永く縁を結ぐんと盟約の為として其場ゆ一刀〳〵傷
れを〳〵るに。我所持の雄の劔と一物一體なれど扱き我家ゆ伝られ雌
雄の劔二振の内の一陰體なれ雌の劔なれを知り。我常ゆ雄の劔を
又賜りね。我先祖を託馬家の祖先ゆ必死をのゞれ。我又託馬の昆裔
を助る事もいうなれ〳〵る去の定めゆ。又吾君と知けるうを。陋巷ゆ困
死なし〳〵ゆ臂の方ゆ加りけれ。つが領中ゆ非命の死を遂させ〳〵。
是我が罪の一つなり。我娘の禍ひ其令の威光をりて人への娘ゆ悪ゆ非義

非道ふみせず。其人うらみ捜しまゐれ安寿姫の咲顔ふもよぶ。そこ
機を伺へ。跡若君の清素性知れば出相好信夫ふ露塵たがうべるちごよ
さうもなのうね安寿姫なれ事成じめて驚れ悟るといえども良ひ
殺しもせんも失ひまり。道見べうもいうね大罪人直地り驚の雄が模
死此うへ春磨苦もう死做とても。罪たくふ好とへ滅ふまよ。
若君の清素ふ恐れ思悟るもあれば。災ひを除れ為の此飲まて姫とい。
我夫婦死とといへども宿世の定業政景の主の清素より罪せられ
かーと。ゐして息。ぎさ文ぞ遣捜ー首さ延政景も使なくへおりしはと
ども正く姫の怨敵ー殺ばうえいに逃ーがと。堅牢かうへ殺せんとそ放
ふ立寄接放ち。氷のごと白刃と振あげて水もたりーび首ふ落そ。搦立を
夫のはぐふに云迷れ。注く痛に所ふ押へうどれ出太夫の首級ふ

取卧ー良歎き。夫の刀おもく取あげ咽へぐと突立れ叫五ふ離外
に刃を刺ふ支状ふく。と立ゆべ。搦立苦ーたふ紛ふく。我子と欲ふ眩く
ふふは貞女の道を守れぐれ。ふ紛ふ。一個なーば二個三個非命ー
ふれ。今となりて漸く目ふ覚ぞや。連属せぬ子の便ふく。ふれ常
の親ふ紛ふ遠ひありて。悪行さ子を子に弱ふ。ふかふ悟ーふもおふ
ばりに愚さよ。親を殺害なもれ大悪人とおふひはる子なれとて。恩愛乃
紐ふるーにあーば。悪さにはけ善ふはきふ。子ほぐに心を子と事化の母親
きふぶれ。あれふう人越とあーば。只此ふう人ふ我子の積悪所詮天罰いぐ
かふ。道を得ぎ。便もなくいぐ非命ふ死んふ。託馬騰輔を討る山角太夫
と手息観吾ふ名ふ合潰く詰ーなば罪障滅ふれまでふあーば。
此ーふ苦患を免かれぐーと帯仕ふ一紙を取出。我子の住所を此ふちに

詳ふ書付あり。きのふの便宜と親子のつれ殺さんと告れ此母のうひを
却ろ〳〵百倍なり。離外ふくのあれかも せめ。つくづく持ちくと芙泉の障りいざ
捨んぞとさゞり〳〵て小石ふ包み。垣の外面ふ投じ足も雄へ此ことを穀ひはを
仇と殺さんとそかりしハ子故の闇ハなくと祈とゆしてよ。さゞくの愚痴も
迷此世の名残も好〳〵たるもなるや絞氣の息のいと苦しく。いくが羞ふやだうり
人の将ふ死なんとうを付其いふくやの衣とわゞ親吾一紙をさ〳〵こうく。
敵の姓名住所地まで搗立の情あく。洋ふ知りけるゆ斜ろ〳〵じ喜び。
くや足も空ふ踊りそゞめゞ。ゆゆと勇こ近んで出行ね都志王丸外記を捕へ
俱ふ眼ゞ分庭前を伝とこれゞ。突光なる妄火此所ふあふれ彼所ふ散こと
良摧くなり。是はさに山椒太夫搗立のあれ罪業滅しがく。魂魄宙宇
に迷ひあれのあゞ。阿弥陀佛〳〵と都志王丸自両個罪障消滅を唱へ

ゐひけれゞ。西方光明赫倫として紫雲棚引虚空ふ花降音樂ことへ異
香四方に薫じ。唯事なるかちれを両個いぶりゐひけれふ大蛇こと十六の角
を折頭をうるぶれ蛇體解る中より。安壽姫よ分諸菩薩俱ふ出現あゝ
邪分も忽童子と現じゐく。我年月岩窟ふ住訓人を取腹をれこと
その数をとくゞ。今ゐる姫の為ふ物ゐて窟を立出れのみゐ〳〵蛇身を免
ゞ仏果と得念佛功力本願ふ重た罪障を消滅ゐ。今俱ふ本覺の都ふ
いくれの有かとにゐ。ゐくくふ此姫のたくけふよゐれ所なり。彼等魂魄宙宇
れ去くぬい正しく罪障のそきにれり。ちゝ姫の助ふようさやゐて峯
月の光と照じ浄土ふ至くゐれ念ゞ。安壽姫又いへらくつくハ行住
座卧法華經讀誦父母へ孝心の功德ゐより。父母と俱ふ仏果を得ゐう。汝
も孝心の功積ゐればかゐくゞ福向ひまり。念願成就近ゐれゞ。汝奉領安

堵なるうへそのつくがの遺骨窟の中に残るを拾ひとり。岩城山へ葬り毎年八朔より重陽に至るまでの中七日潔斎をし。登山なさるべし。他日を免さるべしとて而も女人結界の山と呼。未世までも丹後の人登山をゆるさず永く山椒太夫の悪名を伝へさせて人を疎せるべし。非道の者をしゝ善へ勧る志は如何。二つ目は山椒太夫つくしの達ふ仇なるを心意にあらず。義に背くと守るとれ善人なれども。微運はしてユめれ事皆空しゝ。ふかぬ害を残す至れるつくし母の為を深淵ふ志づむといへども。其為に母は苦しめるふ罪ふより。非命の死を遂ふも山椒大夫が做せれ業のこふあらず。是定業なり彼善ふけ悪ふつけ名を呼ゝ山るを。罪滅仏果を得れの階級なり。さて指立の罪大なりといへども。経書ふ望み善ふ帰ゝたれ仏よめで倶ゝ仏果はるるんべ。わるゝ仏果を求るれ者なれば親子兄弟といふとも。仮初乃詞かゝせれ事のなりがゝ。磐木の武運備足る位の妄霊罪障消滅疑ひなし。努ゝうるがるほどきそといふ。ものゝ消ぐゝ失ふけれ都志王丸外記左衛門愛民意地して仏法きめれば。二個の魂魄こや清濁ふかるれ扶ゝ安寿姫ゆて在ゝれや。姉君やなつかしの名残をふ。両眼の涙玉ふ行先暮ゝて見へざるふ。阿弥陀佛ゝと撫ゝ跡を礼拝ぶたるふ。外記左衛門都志王丸を諫めていへれ。御名残ゝ去事なが。仏果とるるひやれ門出とめれ。ゝ歎きるひなべ障ふもなりけふ。ゝと制。ゝ小臣ゝ此所へ立居ゝ何の運送てゝ。ゝ君を見より接伴国天王寺の阿闍梨ゝ情厚き名僧と世ふ仏。彼僧の許ふ出家を仏をこ山椒太夫が仏法竜ゝ黄金ゝ。軍用諸用も足かゝ。ゝ勢へ接州の地へ赴きゝと御ゝと奪へ指州の地へ赴きね。ゝ

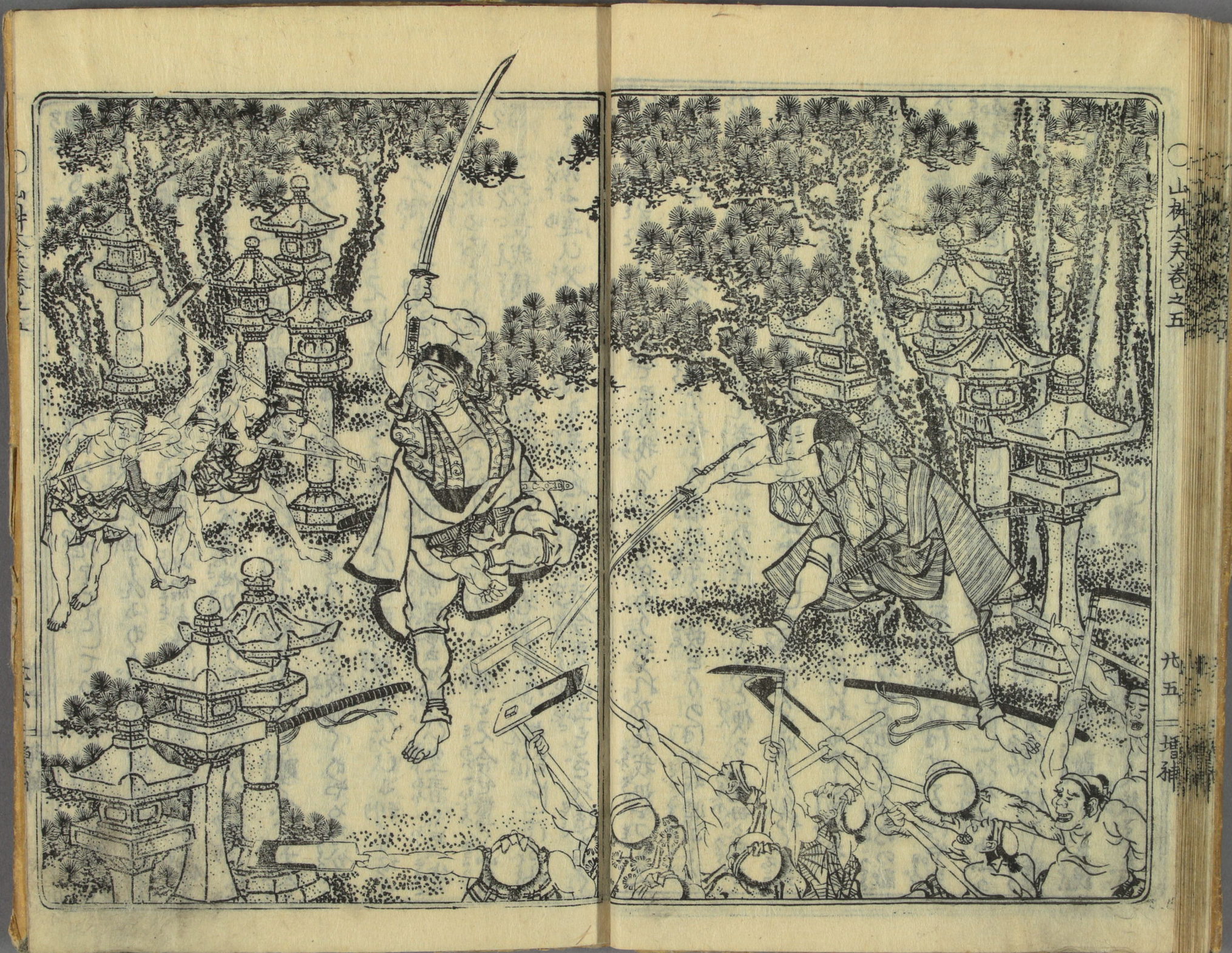
第二十

観吾父母の怨恨を晴す

去程に託馬観吾と。父母の怨敵山角太夫といへる姓名。逃去る地と書残せし橋立が善心に帰たる情に依て。ことぐく尋へねば。天へも登る仙地へも魚封の教にごとく。先松の尾山へ至り捜求めれども。人の住むべき茅舎も形なく。ひれで格立我子代助ひとり。夜間の計あやとうたがひ。未だ附の至らざるを悔ひ。頃日住吉へ宿願して日く籠めれふ。今日す暇を得ざして量らずも。夜深ふ詣ずれば事になりゆきふ。雨繁く風烈く燈火さへも吹消し。あやめもつかぬ暗た夜の。小雨を形て雨もいとひなく。岸の姫松も服ふえ。仕吉近く過れ附大樹の下に物ありて然やれば。うめた声あり。旅人ありやと便るふ。ひ行きふんとされを。旅客くと呼れ者ありしぶのりはぐふ歩行けれ。類りに呼めれゆえふ我る事を知り。立戻てもく縁由を問ひ。慇懃ふいへれを。詰しはいとすれば長物語いふも薄命のいつかぎへぐ。せめて後世を安んぜんと罪滅のゆめふ。母と諸共も同明ふ出し者なれば。あまり烈き風雨なれゆ忍これ形れ大樹の下へ雇の雨を含りゆれうち母なるこの長途よはうれゆれゆえゆや。よ〻下冷ほして腹中ちづ形とぶ。いくらうめてしぶ。漸くうめたいくを寄わ且しも病ひいまぐ愈ぞ。旅の情を尚更の善根なるうん。天那の持合めり。なば情を垂へるひし。我日頃母を大切ふ思へぞ天も感應ありてや。此夜陰とい。ことにちよなれ大風雨よ通りまふ至りねとれ全く神仏れ引合せまふ形形とぶ。いまぐ母を受ざれうらこやよ孫こびめ。母ば。観吾こ孫よそつよ。我も父母ありなば孝とそし斯あるぞれりのとそ。孫ふ涙ぞうかめ。れぞとて途中ゆゆ云形く薬を与めるふ伝るのをへさ

事ぞと心述られど。今我が心述ぬれバ孝子のいさゝかむなしと。便るれ
こゝにしるしもがて懐中より靈丹を出しおかしが。探り出して取押いたゞき
さ彼に誠ある我ずか孝もまたまさし恩人なりと厚くれ謝しけれど。孝心ある
りしと觀音良足をとゞめけれども尽じと。孝子のよく看病なし玉へといゝて別
れぬ。浄土の路の雨に近りても行ぐれしがらへふまいらせ夜ともし火ともし
ごた便りもなく。人家もあれじして仏に頼さなかなふ。たどり行られバ跡より
やよく呼かれ声頻りかれども。外の人ならなにもやと耳にもとめず行しれ。後方
へそや走りよりきし靈丹をおとりしれは汝ずなりかり。いつぎれるものありまずいらせ
まくとまと携へ引ね。觀音がなかり我をば住吉へ詣れ者なり。用の宿ば
下向にまかりでやとしてれはずく彼所の大樹の下に誘つれ行ね觀音
いるかは我をしらゆへ此所へ誘ひしが。いこ我用のありてなり。旅人声荒らして

いかれハ。汝が身をひとつまかぞとも我いのべるのありぞ。それなかれ我母をつれまへ
や。觀音に縁ふ見えれハ。其母なれその病ひ重りし故より。そのほせ我情ふより
力と扣り呼戻しける郎らん。孝心みハありけるらむひと便るく。老母が片方
ふより手をとく擦りするふ。膚氷よりも冷まうふして零ばらりもぬりけく臭
氣盛んふ今須死るれ母も見えど。老若のたがひ斯ありけれ母やと思ふ恩ふ
も渡らざいさゝみを述めれふ。旅人いつるは。我母息終めれぞ汝が身ずるの敵
なりと責めれふも強がど。と汝が母これの死去に取のぼせるらにや先
仏をしづむなしと宥れをめ入ぜして。我母長途ふはられかし持病ふおう
されかれ。こよなれ風雨ふ寒氣烈しく腹痛の病を増汝が身情がはし薬
をあさへしとこえせ毒薬をやりて我母を殺しあれらへそ親の敵よりも云説
ござき金言もあれべからんど覚悟なし遁るゝなかれと裾ひかへ放さゞ丁ば。



観吾も涎さぞ垂らしまで眼白なれを他アごとしていくれい西〜〜拐児なりあてと此ほ立ながてをくれ旅人を脳ふんふあらびやといくれあもおくせどと盗賊とも拐児ともいくでいく我盟ふく此裙を放さじ。ふ〜〜い我まよ傷りわらんば所の村長へ訴へ衆人のたをけ成うけ。他力をりて敵成討ちんと罵ゆれ。観吾涙を正しく我も頼ひあれ名なれど。来ぬ好まぶれども贖ふべき芳令もれるれど。涎さぐなく〜いうあも呼ぶこにまるせんが赤ぶ夜涼くのややあ分ぞ。顔かくらくらこえゆれまで。ちうのみるふび民両の勝負たぶひ利もあるほ。ほづ明るを待ぶと制され射両ゆこ朝風雲成拂ひ空立青く。星劣く月光氷のごとく。塵埃とつりでのり形れば互ひ顔を見合せ驚く山角怒まる紀吾。我積年の怨敵山角太夫汝拐児ふせんと儀計ひしける斗あて。汝ふ連ひ父の敵を討ふ至りね。山角太夫今更逃生とぞれ透もあく。

十方にれく居ちれをとげほし。勝負くと詰ゆけ是ほ。せきとふな我積悪の報ひ今降りれうえハ。逃もせじかれもせぬさはうれ幼賊〜き者あもあ〜び。我丹後を立退き松尾山ふ引籠て。ま下の告りにまくれ丹後へ行〜ぶ。や長者の家滅却ひ。甲斐なく此の死と逃〜と変直地ふとりてかく。この所ふ往ふたなやはせ成ゆくり形〜も今汝ふめくて會。天の云うしまるぞこしや我説念ひしける形り。観吾嘘笑ひ盗人の盈寝ふ我を驚さんとおや。我么腹を知るえいかくの如〜と透をこんあらせ観吾の腹腹を蹴めげ。吻とう絞め〜非間ふ一足出して逃去ゆ向方ふ。殺〜た人足ゆへげ成ゆ〜指勝木ニ巻く巻ふるん妄者を盗ま所ふを投〜ふ成ふ茶毘を守れ人なの誰ゆふん逃ゆるとえるよ。ゆんる妄者成盗ふ外〜人とて山角の臑を噛ひ。ちううれ形ゆふ辛ひしてう人〜けまばゆや

記吾親の敵なりとよばはりて斬付るを。強氣の山角手痛負ながらひるまず
うけつ流しつ上段下段。切かけ付込進めば退く曲尺釣合しばし十合余りも
戦ひしが。荼毘の人多亡者なりけり。抱ひしいどみあひ。さうなくに走りぬ此方より
記吾山角が脊を踏まえけり。さしも知よと脊の通りをぐさと突。勝しと知も
ひやれ。双りて雌ぞてたるやさ。そや虫のかよへれ息も絶ゆんへるれで首打落し
布に脊ひ父母の墓前へ備へんとて近地に近江國へ急ぎぬ。積年の悪行
天孝子として罪しまんぞ。孝子の功をよそさせんとに僥倖と。山角への悪報
のうをらたとぞ。

第二十一　都志王再舊領を起す

去程に梅津中納言兼定卿は。洛西の権をかまへて貴なりい。と質素に
家政届きまへど。惣に角足さるれ一子なきぞ愁ひて。清水寺へ詣で観世
音へ祈願なしたまひけれ験しありて。一女子を儲く成長するに随ひ。自然と
温和にして女の道も惡したまへどれ仏ありし。殊に容色風俗いかでかみも
なれ佳人なれバ尚慈しみも深く。月日に関守なれバあらえそや十六夜の月
も差らぬ氣色となりけり。一夜兼定卿夢想のつげありける摂州天王寺
阿闍梨のもとに。世に忍び居られ男子とそ一女と娶せなバいよく女子
の福れらんと清水寺観世音の告なりしかば。兼定卿とかく天王寺の阿
闍梨の許へ人を走らし縁由詳に説都志王丸を養子に乞ひうけられける
を年頃のなり。阿闍梨も都志王の身のうへら明しあかしけれバ。問答せずして居
あひやうに外記左儀つ政景とて返へれぞ。逆賊村岡玄蕃を討亡さんため
よかからんと勧め兼定卿の養子となし。其身そ天王寺にとゞまり。ふたたびかの
万端の軍用をもとめ旧臣ども追々彼方を集れに或ひハ舊臣

或ひハ旧恩の者ゆゑ、ふるの巣を放ち、蜂のごとく招かゞして、ありぬ。却て託馬親吾と父母の怨敵山角太夫が讐討修羅立執を晴しけるゞ。さや父母ゆゑ雄が菩提の為永く染衣ふうと永く吊のゞやと天ゝる阿闍梨の許へ行く徒身とおもふん事なれ。阿闍梨は法命の縁由を聞くそうく肯ひ、観吾の望にまうせ頭を剃て染衣を与へ名を正せとつゞ出家とおもへ傍ら外記左衛門縁由ハ法ゞに父居りしが観吾ふ利害て。法名近江の国滋賀郡苗鹿村ゆて託馬氏を名乗るハ果して磐木家の忠臣託馬郡司兵衛俊国とゝ者の一類なゞと宿ふ観吾答くいゝ母も託馬郡司多情を我家の本家となゞ所の者なりけるゞ国隔未世ふ及ゞ自然と音信も断て疎遠となりしゞ。主家と倶ふ亡びゆゑと父。政景又ゝ幼ハ父母ゆゑ児女のたち發心をしゆゑ薄命も利ふ

ふ哀ふげれども正しく武士の畢竟として名跡絶べゝ本家ハ又捨一已の愁傷ふ家ハ従うゝしゆゑハ何事ぞや。こゝ我主家ふ仕なゞ。託馬を忠臣の家として厚く用ひらるゝふ。甲斐なゝ仏を改むゞと却けるゞ。此利ふ責られ一旦ゆゑの回答ハ。黙念として居りゝゞ流石ふ阿闍梨も我徒弟とゝでゝ者なりけるゞ。政景のいゝゝ所利非明白にゝゝ俱ふ磐木家へ仕ん事ハゝゝゝ。一場法難となりゆゑで又凡俗の身ふ主帰ふ事も難かりん。それで其侭託馬正十坊俊定と先祖の一字とけ名乗。磐木家の臣下と為り一端の功ありけれ後ゝ。ゆゑ存念のごゝ義子ゝて出家ハゝゝゝゝゝと阿闍梨の教訓ふ推辞ゝゝゝゝゝゝゝゝ磐木家の臣下となゝ人事と吹挙ゆゑと約定をしゆゑ。叔梅津兼定御ゝ都志王丸を養子とゝ。系図の書ハ出させゝふ。薄命滅家の行状ゝ詳ゝ

洛ふ上て帝に奏し。奥州の国守村岡玄蕃要道を討亡し。父母の怨恨を晴し給の兎文ゆ下し賜ふ。都志王丸兼定御を慕ひ諸臣等なのめ形ら喜び俱ふ商ふ奥州へ下て。後ふ天永元庚戌年都志王丸十五歳ふ成て父の怨敵村岡玄蕃要道を討亡せ。要ふ応ふ志ある者もこの絵を改め津志王丸へ降伏ふしぬ。因て旧領ふしめのふとく賜ふて。再び磐木家繁昌ふしぬ。梅津兼定御も都志王丸臣等ゆ武功と文且感し且喜び都志王丸と娘の間ふ出生ふし給ふ一子ゆる附そ男女ともに兼定御の世継ふしぬと事と定給なそ。都志王丸をいよ〳〵旧臣等と厚く愛し。政事ふ露私なく。大村外記左衛門政景をして政事の長と居置給へ。いよ〳〵家富永く末世の感話となりぬ。

山椒太夫榮枯物語巻之五　大尾

編者　梅暮里谷峩
畫工　葛飾北齋
大阪心齋橋通南本町
書林　淺井龍章堂
河内屋吉兵衛